# 『曹洞二師録聞解』の偏向

## ――偏正五位説を中心として――

石附勝龍

### はじめに

曹洞禅旨を理解しようとする場合、まず中国曹洞宗開祖洞山良价禅師（八〇七―八六九）曹山本寂禅師（八四〇―九〇一）の理解に始まらねばならぬのは、一目瞭然の筈である。

然るに、日本曹洞宗開祖永平道元禅師（一二〇〇―一二五三）の説に比して、右二師の説が余り重視されていず、研究も極めて少ないのは、異常といえる。それには種種理由もあろうが、そのひとつとして、二師の語録の理致的難解性などがあげられよう。ともあれ古来、二師の語録の註釈解釈は非常に少なく、且つ右の宗旨的独自性を強く意識したものとなると極度に局限されてくる。(1)

即ち、曹洞宗旨を明らかに意識し、二師録を全面的に解釈したのは、斧山玄鈿和尚（一七〇一―一七八九）の提唱筆録『曹洞二師録聞解』があるのみだが、これは和語で解し易く、『曹洞宗全書』にも収録されており、影響も大きい。

ところが、これについて、近年、故岸沢惟安老師が資料面から、『聞解』がその参学師であり伝統宗学の祖述者といわれる面山瑞方和尚（一六八三―一七六九）よりも、むしろその対極として異端視されている天桂伝尊和尚（一六四八―一七三五）の方に傾いている、と明言されたことの問題は重要である。(2)

本論文はこれを思想的に考察し、曹洞禅旨理解の一助に資せんとするものであるが、スペースの都合上、曹山録の中の偏正五位関説部分の洞山『五位顕訣』と、それに付した曹山の解釈『揀』が二師録理解のキーポイントであるともいわれているので、『聞解』のこの部分に焦点をしぼってゆきたい。

この考察をなすにあたり、比較対照のために、五位顕訣並揀の古い型態を保ち、広輝の釈もある『重編曹洞五位』と、日本におけるその最古の註釈書である傑堂能勝和尚（一三五五―一四二七）南英謙宗和尚（一三八九―一四六〇）著『洞上雲

月録』と、更にそれによりながら、和語を用いて論旨を展開させた、本光瞎道和尚（…一七七二）著『曹山解釈洞山五位頌訣鈔』[3]の説や、右に述べた面山や天桂の説との関係において一考することにしたい。

## 一、宗乗理解の種々相と問題点

岸沢老師は『聞解』の非伝統的な天桂寄りを指摘されているが、それはあくまでも厳しい意味の伝統性を問題にしているためであり、『聞解』には天桂より強い宗旨意識すらある。従ってまず広くその宗旨意識を辿ってみたい。

**1　体得性**　曹洞宗旨は理致を尊ぶため、禅の体得面の軽規が云々されることもあるが、勿論これは偏見にすぎない。これに対し『聞解』は禅的体得を強調して、

学人ガ如何是ト問テクルニ、師家ノ答話スル言句ニ就テ、乖角シソムイテハナラヌ、是レ正位斗リ居レバ正位ニソムク、又タ偏位ニ斗リ居レバ正位ニソムク、故ニ乖角シソムイタ時ハ、自己ノ大事ノ有ルコトヲ知ラヌト云モノジヤ[4]、

と、五位の宗旨が師家と学人の間における、自己の大事・本来の面目の実現に外ならぬと、禅の命脈を強調している。

**2　綿密没蹤跡**　次に曹洞宗旨として一般に強調される綿密没蹤跡に関しては、宗旨では円が重要であるとして、

円者、偏位ノ用中ニ物ガナイナレバ正位ヨ喩バ有ト云テモ有ナラヌモノナレバ、無ニシテ正位ヨ、是レ無物ナレバ、何ンデモ触レルコトハナイ、故ニ両意ヨ、円ニスル也……正中ニ功用ノ働ガナイカラ、ソコニ居ラヌヲ為レ偏、コレ正中ヨリ、以テ回リテ偏ト云也、コレ一位ニ二位ガ備ル也、故ニ両意ヲ円ニスルト云ナリ[5]、

と、正偏の一方に落ちてはならぬ没蹤跡にこそ、正に偏あり、偏に正ありの綿密があると述べている。ここで、綿密没蹤跡ならざるものは「正ト云テ正ノ功ニ混ゼズ、偏ト云テ偏ノ功ニ混ゼヌ」と功、途中のものに過ぎぬと揀別しているのは、曹洞的徹底を示すものとして重要である[6]。

**3　傍提**　曹洞宗旨の独特な表現とされる傍提について、

洞上ニハ中道ヲ犯スコトヲ不レ欲也、譬バ臣下ノ方ヨリ君ト斗リ呼デ、諱ヲ呼ヌ如ク、敢テ(要カ)メツタニ、ヲモイ切テ、サシテ云ザル也、是吾ガ曹洞宗ノ肝腰也、……学者タルモノハ、先ヅ一一自己ノ宗旨ヲ知ネバナラヌ、真如実際ノ法体ヲ将テ、何モナイナイト云テ、碩突(頑カ)ニ棒喝混雑シテ行令スルコトハ宜クナイ、妙明ノ妙明タル場ハ、体尽テ妙モナイ、コレヲ守レバ碩空(頑カ)ニシテ、傷トイタミ、触トフルルカラ、体尽タ処ニ居テハナラヌ、故ニ力メテ諸縁ニ逢テ、妙明タル中道抔ヲ借ラヌト也[7]、

と、中・妙明を犯さず、努めて縁において表わすことを尊ぶと明快に釈しているのは、洞山の頭長三尺頸短二寸、曹山の死猫児頭、道元禅師の放尿香の説法、清規実践行仏威儀に連なるものであろう。

**4　宗旨の卓越性**　『聞解』は曹洞の家風を他家のそれと比較して、

洞曹二師ノ家風ヲ、……世間ノ人ガヲモヒラクニハ、平坦ニシテ何ノ節シ角ナシ、平ニ斗リ在テ、無活用ート、徳山抔ノ羊ニ咄喝、如ニ雷電ノ活機用ノ英雄ノ謀略、勢ヒガ無イ抔ト云テ、洞上ノ威儀ヲシラヌハ、嗚呼気ノ毒ナルコトジヤ、[8]

と徳山を、それに続いて「サワガシイ辞バ斗リアル」黄檗・臨済の家風に対して、洞曹の威儀の家風の独自な卓越性を主張している。

以上によれば、『聞解』は中国・日本を貫ぬく曹洞禅旨の骨子を祖述して遺漏ないようであるが、禅的体得を強調しすぎると功勲の肯定に堕し易く、綿密を強調しすぎると教学的論理性に堕し易い。古来この轍におちぬ先徳は稀だとさえいわれるが、『聞解』はどうであろうか。

## 二、宗乗偏向の諸相

**1　功勲性**　『聞解』は右のように功勲を強く批判しているところがあるが、一方、肯定している面もある。

即ち『揀』が功勲中の兼帯があるとして、大無明底人、闡提、紅爛底人、保任底人を例にあげているのを『聞解』は解釈して、

大無明底人ハ無明ヲ全体トスル境界……闡提ハ大事ノコトヲ知テ……父母ニ孝養ヲ成ス境界ナリ、然レドモ……実実ニ祖仏及手前ノ、本来ノ父母ヲシラヌナリ、紅爛底人ハ、身心脱落シテ、先ヅ好イト云行履……菩提ノ道ヲ保任スル底ノ人ハ、菩提境界ナレバ、脚ヲ刺シテ泥裏ニ入テ、下化衆生スル、[9]

として、1無明者は全く迷の中にある者、2闡提は大事を知つて奉重する者、3紅爛底人は身心脱落者、4保任底人は究極的な下化衆生の実践者とし、全く段階的な進展を示すものとしている。

しかし、これでは兼帯にならぬから、これを『聞解』は「按ズルニ、功ニハ自ラ位具ハリ、位ニハ功具ル也」と一位即一切位の論理を援用して会通している。

これを『揀』『釈』でよくみると、四種人とは、例えば無明人とは闡提の向去に対し今日底人として区別しながら「不明不暗」「不レ受レ触」であると述べ、一切を尽くす人とする。これが功勲であるというのは、段階としてではなく、偏堕である故に問答において兼帯に直に抽き入れ得るという意味なのである。[10] この二者の立場を比較すると、『聞解』が一般的な段階性をそのまま認め、又それを宗乗化するのに、如何に教学的観念に依つているかが分ろう。よつて、次にこの教学性の面を少し仔細にみよう。

**2　教学性**　洞曹の五位説は実践的主体的なものであり、正中偏の好例とされる不顧者とは、曹山録の「子帰就レ父。為ニ

甚麽二父全不レ顧。師云。始成二父子之恩。」をさし、父が子に全く応対せぬ正位の一方究尽に、子の偏を包む意味、綿密没蹤跡の宗旨があるとするのである。

しかるに『聞解』では、不顧者を不頑者ととり、「カタナクハナイモノガ、正偏有無ニ、自在ヲ得ル底人ト云モノジヤト也」[11]としているのは、一方究尽の実践的意義表明の稀薄を示すものであろう。

又『揀』が正中来で「黒豆未レ生レ芽時作麽生」をあげているのを『聞解』は、

大豆ハ未ダ芽ヲ生ゼヌケレドモ、生ズル道理ハ具テ居ル也、未ノ字ハ後ヲ起ス言バ也、非ト不トノ二字ハ、言イ切タ言バ也、決シテ無イト云字ニ用ル也[12]、

と釈しているが、ここには前述の一方究尽・独立の厳しさが薄れ、正偏の連続的融合性の強調が著るしい。即ち教学的観念的傾向を示しているといえよう。

以上『聞解』には、一見主体的な体得・綿密没蹤跡・傍提等の曹洞禅的特質はうかがえるが、仔細にみると、宗乗としては聊か問題がある功勲的段階性や、教学的観念性の存在が指摘されるのである。

## 三、先徳による『聞解』への影響

右の『聞解』の特質・偏向をはじめに述べた如く、諸先徳の説との関係においてみよう。

徳山・臨済等の批判において、傍提綿密没蹤跡の特質を宗旨の卓絶性の意識と関連づけて説くのは、傑堂・南英・本光になく、天桂にもないから、面山の影響といえる。[13]

しかし、対機による段階修の許容は、天桂が「大凡五位者就二学人所見一而立レ之」「又有二四位各行歴者一」[14]とする立場に応ずるもので、他にはみられぬから、天桂の影響であろう。

教学性については、不顧者を不頑者としているのは、傑堂・南英・本光説にのみあるもので[15]、又功と位の教学的会通による混淆も、三者が正中偏・偏中正の偏に功をあてはめているのに端を発しているのが知れる。

しかしその結果、一位即一切位の論理的回互を尊重し、前二位と次二位の回互・不回互の差が、単に回互の浅深の差に転化する傾回すら生じているのは、全く天桂説の影響を考えることなしにはあり得ないと思う。[16]

## おわりに

以上を綜合していえることは、『曹洞二師録聞解』は、所謂の曹洞宗旨として、臨済宗旨に対する独自性強調の面では面山の影響をうけているが、体験的内容的なものに関わる深層の構造面では、傑堂・南英・本光の一連の系統的解釈を通じつつ、更にそれを超えて天桂の洞済を混淆し教学的論理性を

導入主張した、自由思想家的影響を強くうけているということである。[17] これらを顧慮することなしに『聞解』によるならば、必ず洞曹の趣旨を曲解することになると思う。[18]

1 二師録に関する釈としては、斧山『曹洞二師録聞解』の外に、廓堂『曹洞二師録蒙解』(字句の解釈のみ) 洞水『洞山悟本禅師・曹山本寂禅師語録弁悞』(局部的な引用原典やその過誤をのべる) 天霊『曹山録釈解』独清軒『曹山録釈解』(以上二者は易学偏重の金峰従志編曹山録に対するもので宗旨からは程遠い) があるのみで、臨済録の末書が『禅籍目録』で58種もあるのには比較できない。

2 『道元』昭和十一年九月号岸沢惟安老師「正法眼蔵聞解につきて」で、『眼蔵聞解』の眼蔵の配列、本文の削除、袈裟功徳と伝衣巻の同一視等や『二師録聞解』でも天桂の引用が多いことから斧山の天桂寄りを立証されているが、思想的内容については殆んどふれられていない。ついでに付言すれば『眼蔵聞解』には弁註にない天桂語の引用があるから、斧山は天桂に随侍したことがあるのではないかといっておられる。

3 以上三本共に『曹洞宗全書』註解五所載による。

4 右書718頁下。

5 同書717頁上・下。

6 功位俊別の曹洞の本意については『印仏研』第四十冊拙論「広輝釈五位顕訳並揀の曹洞宗旨」199頁下参照。

7 前掲『曹全書』691頁上。

『曹洞二師録聞解』の偏向(石 附)

8 右書頁下。因みに洞済一轍は天桂の強調。『曹全書』注解三「報恩篇」550頁上。

9 『曹全書』注解五721頁下。

10 右書13頁「薬山与二新豊一。幷前諸徳。所レ出超過入二正位一。是玄談奇特句已次到二小小得力者一。則抽入二正位一。此例語常用也。」と小得力者は功から兼帯に入らしめるとする。『宗学研究』第十八号拙論「道元禅師における公案拈提の特質」230頁参照。

11 右書717頁上。

12 同書718頁下。

13 『曹全』語録三「面山広録」432頁「毫光照二東方万八千一。欲レ見眼睛。到二者裡一徳棒臨喝。嚼レ塩止レ喝。百払南刀。臨レ嫁医レ癭。宜哉杲大恵仰レ天唾也。」と済下を批判する。

14 前掲「報恩篇」594頁下。

15 『曹全書』注解五「雲月録」68頁下。右書「顕訣鈔」496頁下で「不レ頑(広輝釈本作レ顧)者」と不顧を故意に不頑としている。

16 前掲「報恩篇」592頁上「凡曰レ偏則有レ正。曰レ正則有レ偏。挙レ一全収。」「抑来者正中偏之正中来。至者偏中至。而亦稍明二浅深一爾。」

17 天桂の立場については『宗学研究』第九号所載拙論「初期江戸宗学の一考察—偏正五位説よりみた天桂和尚の地位—」

18 『聞解』の偏正以外の偏向例として、洞山録の白雲と青山の有名な問答を、それぞれ業識始覚と本覚をあてて釈す心理的説明もあげられる。『聞解』634頁上参照。